Osaka Shoin Women's University Repository

玉鬘の巻の「大島」について

久保　重

夕顔の忘れ形見の姫は乳母の許で養われていたが、乳母の夫が太宰の小弐に任ぜられて任国に下るのに伴われて、四才の時、乳母の一家とともに筑紫に赴く。次の本文は、旅の途中小弐の娘二人が船中で和歌を唱和する場面である。

おもしろき所どころを見つつ、「若うおはせしものを、かかる道をも見せたてまつるものにもがな」「おはせましかば、我らは下らざらまし」と京の方を思ひやらるるに、返る波もうらやましく心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

舟人もたれを恋ふとか大島のうらかなしげに声の聞こゆる（傍点筆者）

来し方も行く方もしらぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらん

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。（注1）（玉鬘）

本稿では、右の文中の「大島」の所在について考えたい。

一　『源氏物語』に出る地名

奥村恒哉氏は「『源氏物語』に出てくる名所には、すべて典拠があることは、よく知られた事実である。」（『歌枕』一八〇頁）と云われる。今、主題のもとに論を進めるに当って、まず、『源氏物語』に出る地名・名所名と既存の和歌との関係、具体的には歌枕との関係を調べて見よう。一、範囲を『源氏物語』第一部に限り　二、地名・名所名は京洛とその近郊を除くこととし　三、歌枕は、『能因歌枕』・『和歌初学抄』・『五代集歌枕』・『八雲御抄』に拠ることとした。これらの歌学書は『源氏物語』以後の著作であり、『源氏物語』の作者の歌枕に関する見解と、これら歌学書記載の歌枕との間には相当数の出入があることと想像される。証歌はこの間隙を埋めるのに幾分役

Osaka Shoin Women's University Repository

立つのかも知れない。

〔表Ⅰ〕（「能因」は『能因歌枕』、「初学」は『和歌初学抄』、「五代」は『五代集歌枕』、「八雲」は『八雲御抄』の略称。○印はその書に、上欄の地名・名所名の記載があることを示す。）

登場順位	巻名	地名・名所名	能因	初学	五代	八雲	証歌例	番号
一	桐壺	宮城野	○	○	○	○	古今集六九四　よみ人しらず。古今六帖三四四九六 みやぎののもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつごと君をこそまて	1
二	帚木	園原	○			○	新古今集九九七　是則。古今六帖三三八六五 そのはらやふせやにおふるははきぎのありとはみえてあはぬ君かな	2
三	夕顔	息長川			○		古今六帖三二三五九 にほどりのおきなががはは絶えぬとも君にかたらふことつきめやは	3
四	〃	益田の池	○	○	○	○	拾遺集八九四　よみ人しらず。 ねぬなはのくるしかるらむ人よりも我ぞますだのいけるかひなき	4
五	若紫	富士の山	○	○	○	○	古今集五三四　よみ人しらず。古今六帖三三五一一 人しれぬおもひをつねにするがなるふじのやまこそわがみなりけれ	5
六	〃	明石の浦	○	○	○	○	古今集四〇九　よみ人しらず。古今六帖三二六七二 ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく船をしぞおもふ	6
七	〃	豊浦の寺				○		7
八	〃	難波津	○		○	○	古今六帖三四八七五 なにはづにさくやこの花冬ごもり今ははるべとさくやこの花	8

Osaka Shoin Women's University Repository

九	若紫	安積山			○	○	○	○	古今六帖三一八六一 あさかやま影さへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは	9
一〇	〃	くらぶの山	○		○	○	○	○	古今集一九五　元方。　古今六帖三一一八六　元方。 秋の夜の月の光しあかければくらぶのやまもこえぬべらなり	10
一一	〃	あしわかの浦						○	古今六帖三三三八八 あしわかのうらにきよする白波のしらじな君は我おもふとも	11
一二	〃	和歌の浦	○	○	○	○	○	○	古今六帖三五一九六　赤人。 わかのうらに潮みちくればかたをなみあしべをさして鶴なきわたる	12
一三	〃	武蔵野	○	○	○	○	○	○	古今集八六七　よみ人しらず。 むらさきのひともとゆゑにむさしのの草はみながらあはれとぞみる	13
一四	末摘花	三笠の山	○	○	○	○	○	○	古今集四〇六　仲麿。　古今六帖三一一三〇　仲麿 あまのはらふりさけみればかすがなるみかさのやまにいでしつきかも	14
一五	紅葉賀	橋柱（長柄の）	○	○	○	○	○	○	拾遺集四六八　清正。 芦間よりみゆるながらのはしばしら昔の跡のしるべなりけり	15
一六	〃	とこの山	○	○	○	○	○	○	古今集（元永本）六四九の次　古今六帖三三九〇七あめのみかど。 いぬがみのとこのやまなるいさらがはいさとこたへよわがなもらすな	16
一七	花宴	いるさの山			○	○	○	○	後撰集三七九　宗干。古今六帖三一七九六　宗干。 あづさゆみいるさのやまはあさぎりのあたるごとにや色まさるらん	17
一八・一九	賢木	鈴鹿川（2例）	○	○	○	○	○	○	古今六帖三二四三七 すずかがは音にききてやよをばへん年ふるごとになるるよもなく	18

Osaka Shoin Women's University Repository

19	二〇	賢木	関（逢坂の）	○	○	○	○	○	古今集三七四　難波萬男。 あふさかのせきしまさしきものならばあかずわかるる君をとどめよ
20	二一	〃	逢坂山		○	○	○	○	古今集（墨滅歌）一一〇七　よみ人しらず わぎもこにあふさかやまのしのすすきほにはいでずもこひわたるかな
21	二二	〃	松が浦島		○	○	○	○	後撰集一〇九四　素性。 音にきくまつがうらしまけふぞみるうべも心あるあまはすみけり
22	二三	〃	浦島		○		○	○	古今六帖三一七六七 白妙のなみうちかへしあまごろもうらしまにきてぬれやわたらん
23	二四～二六	須磨	須磨（3例）						古今集七〇八　よみ人しらず。 須磨のあまの塩やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
24	二七	〃	大江殿						
25	二八・二九	〃	松島（2例）	○	○	○	○	○	後拾遺集八二八　重之。 まつしまやをじまのいそにあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか
26	三〇	〃	伊勢島				○	○	和泉式部集五二四 いせしまによさのうみよりとびかよふうはの空にもかひになしけり
27	三一	〃	関（須磨の）		○		○	○	古今六帖三二〇五九 すまのせきあきはぎしのぎ駒なべてたかがりをだにせでやわかれん
28	三二～三七	〃	須磨の浦（6例）		○		○	○	古今集九六二　行平。　古今六帖三二六四七 わくらばにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ

Osaka Shoin Women's University Repository

三八	〃	明石の浦	○	○	○	○	前出。(同 6)				
三九	〃	住吉(社)	○				拾遺集八六九 よみ人しらず。 すみよしのあらひとがみにちかひてもわするる君が心とぞきく	29			
四〇	〃	△飛鳥井						30			
四一・四二	明石	住吉の神(2例)	○	○	○		前出。(同 29)				
四三・四四	〃	明石の浦(2例)	○	○	○	○	前出。(同 6)				
四五・四六	〃	明石(2例)					拾遺集四七七 人麿 しらなみはたてど衣にかさならずあかしもすまもおのがうらうら	31			
四七	〃	須磨					前出。(同 23)				
四八	〃	淡路島	○	○	○	○	拾遺集九二六 人麿。古今六帖三二八一一 すみよしのきしにむかへるあはぢしまあはれと君をいはぬひぞなき	32			
四九	〃	△伊勢の海	○	○	○	○	古今集五〇九 よみ人しらず。古今六帖三二八五七 いせのうみにつりするあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる	33			
五〇	〃	関(須磨の)	○			○	前出。(同 27)				

Osaka Shoin Women's University Repository

五一	〃	難波							古今集六〇四　貫之。　古今六帖三四六六二　貫之。 つのくにのなにはのあしのめもはるにしげきわがこひ人しるらめや	34
五二	〃	住吉（社）	○						前出。（同29）	
五三	〃	須磨の浦		○	○	○			前出。（同28）	
西〜五六	澪標	明石（3例）							前出。（同31）	
毛・五六	〃	住吉の神（2例）	○		○				前出。（同29）	
五九	〃	住吉（社）	○		○				前出。（同29）	
六〇〜六三	〃	難波（4例）							前出。（同34）	
六四	〃	住吉の松	○		○				拾遺集四五六　貫之。 音にのみききわたりつるすみよしのまつの千歳をけふみつるかな	35
六五	〃	堀江	○	○	○	○			古今集七三一　よみ人しらず ほりえこぐたななしをぶねこぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ	36
六六	〃	澪標	○						後撰集一一〇四　玉渕女。　古今六帖三四〇二九 なにはがたなににもあらずみをつくしふかき心のしるしばかりぞ	37

Osaka Shoin Women's University Repository

六七・六六	〃	田蓑の島（2例）		○	○	○	○	古今集九一三　よみ人しらず。　古今六帖三一七六三 なにはがた潮みちくらしあま衣たみののしまに鶴なきわたる	38
六九	蓬生	白山	○（こしの）	○	○	○	○	古今集四一四　躬恒。　古今六帖三一六一五 きえはつるときしなければこしぢなるしらやまのなは雪にぞありける	39
七〇・	関屋	須磨						前　出。（同　23）	
七一	〃	筑波嶺	○		○	○	○	古今集一〇九五　東歌。 つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし	40
七二	〃	関（逢坂の）	○		○	○	○	前　出。（同　19）	
七三・七四	〃	石山（2例）	○				○	公任集二三一二七 くれがたきけふにてしりぬいしやまのやまのいはほをいのるしるしは	41
七五	〃	打出の浜	○	○	○	○	○	拾遺集九八二　よみ人しらず 近江なるうちいでのはまのうちいでつつうらみやせまし人の心を	42
七六	〃	粟田山		○			○	古今六帖三一七七五 あはたやまこゆともこゆと思へどもなほあふさかははるけかりけり	43
七七	〃	関山						馬内侍集二三七六九 あふさかのせきやまこゆるけふさへやなほや涙のつきせざるらん	44
七八	〃	（関の）清水	○					古今集五三七　よみ人しらず あふさかのせきにながるるいはしみづいはで心に思ひこそすれ	45

Osaka Shoin Women's University Repository

七九	〃	近江路							後撰集七八六　中正。 あふみぢをしるべなくてもみてしがな関のこなたはわびしかりけり	46
八〇	〃	逢坂の関	○	○	○	○	前出。(同 19)			
八一・八二	絵合	明石(2例)					前出。(同 31)			
八三	〃	伊勢の海		○	○	○	前出。(同 33)			
八四・八五	〃	須磨(2例)					前出。(同 23)			
八六	松風	明石					前出。(同 31)			
八七	〃	淡路島		○	○	○	前出。(同 32)			
八八	薄雲	吉野の山	○	○	○	○	古今集三二一　よみ人しらず。　古今六帖三一〇八四 故郷はよしののやまし近ければひとひもみ雪ふらぬ日はなし	47		
八九	〃	武隈の松	○	○	○	○	後撰集一二四二　元善。 うゑし時契やしけんたけくまのまつをふたたびあひみつるかな	48		
九〇	〃	夢のわたり					奥入所引古歌 世の中は夢のわたりの浮橋かうちわたりつつものをこそ思へ	49		

Osaka Shoin Women's University Repository

九一	〃	明石							前出。同31		
九二	朝顔	いさら川					○		古今集（元永本）六四九の次　古今六帖（新国）三〇六一 犬上のとこの山なるいさら川いさとこたへよわがなもらすな	50	
九三	少女	辛崎	○				○		古今集四五九　伊勢。 波のはなおきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらん	51	
九四	〃	難波							前出。同34		
九五	玉鬘	須磨							前出。同23		
九六	〃	大島			○	○			後撰集八三〇　朝綱。　古今六帖三三七六六 おほしまにみづをはこびしはや船のはやくも人にあひみてしがな	52	
九七	〃	金の御崎			○	○			万葉集一二三〇 ちはやぶる金の御崎をすぎぬともわれは忘れず志賀の皇神	53	
九八・九九	〃	松浦（2例）				○			万葉集八五六 松浦なる玉島河に鮎釣ると立たせる子らが家路知らずも	54	
一〇〇・一〇一	〃	鏡の神（2例）							紫式部集二一七九〇 あひみむとおもふ心はまつらなるかがみのかみやそらに見るらむ	55	
一〇三	〃	松浦の宮の前の渚								56	

Osaka Shoin Women's University Repository

一〇三	〃	響の灘	○							一条摂政集一七六 風はやきひびきのなだの船よりもいきがたかりしほどはききや	57
一〇四・一〇五	〃	川尻（2例）									58
一〇六	〃	韓泊									59
一〇七・一〇八	〃	八幡（の宮）（2例）									60
一〇九	〃	石清水	○					○		公任集二三一二三 いはしみづかざしのふぢのうちなびききみにぞかみも心よせける	61
一一〇	〃	筥崎（社）		○	○	○		○		高遠集一七八 ちはやぶる　神のなかにも　はこざきの　ふたごころ　たすけあらば…（長歌）	62
一一一	〃	初瀬					○	○		信明集二〇一九六 世の中のたのみどころにせしものをはせをばかくややかんと思ひし	63
一一三	〃	椿市				○	○				64
一一三	〃	清水の御寺									65
一一四	〃	観世音寺									66

Osaka Shoin Women's University Repository

二五・二六	〃	初瀬川（2例）	○	○	○	○				古今集一〇〇九　よみ人しらず。はつせがはふるかはのべに二本ある杉年をへて又もあひみん二本ある杉	67
二七	〃	三島江		○	○	○				拾遺集一二一二　人麿。　古今六帖三三四五一みしまえのたまえのあしをしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど	68
二八	初音	松が浦島		○	○	○				前出。（同21）	
二九	〃	△竹河									69
三〇	胡蝶	山吹の崎		○		○					70
三一	〃	井出の川				○	ゐでのたまみづ			拾遺集六八　順。春ふかみゐでのかはなみたちかへりみてこそゆかめ山吹の花	71
三二	〃	大田の松								古今六帖（拾遺）三五三三六こひわびぬおほたのまつのおほかたは色にいでてやあはむといはまし	72
三三	常夏	△貫川	○	○		○					73
三四	〃	勿来の関	○	○	○	○				後撰集六八三　小八条御息所。たちよらばかげふむばかり近けれど誰かなこそのせきをすゑけん	74
三五	〃	武蔵野	○	○	○	○				前出。同13	

Osaka Shoin Women's University Repository

二六	〃	常陸の浦 一本海						○ 海	古今集四五七　兼覧王 かぢにあたる波のしづくを春なればいかがさきちる花とみざらん	75
二七	〃	いかが崎	○	○				○	古今集四八九　よみ人しらず。 駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれどもきみを恋ひぬ日はなし	76
二八	〃	田子の浦	○	○	○			○		77
二九	〃	大川（野辺）						○	古今集六九九　よみ人しらず。 みよしののおほかはのべの藤波のなみに思はばわがこひめやは	78
三〇	〃	駿河の海			○			○		79
三一	〃	須磨の浦		○	○			○	前　出。同　28	
三二	〃	筥崎の松		○				○	拾遺集五九一　重之。 いくよにかかたりつたへんはこざきの松のちとせのひとつならねば	80
三三	行幸	音無の滝	○		○			○	拾遺集七四九　よみ人しらず。 恋わびぬねをだに泣かむ声たてていづこなるらむ音無の滝	81
三四	〃	春日の神							拾遺集六二〇　忠房。 めづらしきけふのかすがのやをとめを神もうれしとしのばざらめや	82
三五	藤袴	吉野の滝		○	○			○	古今六帖三三〇八三 てをさへてよしののたきはせきつとも人の心をいかがたのまん	83

一三六	〃	妹背の山	○	○	○	○	古今集八二八 よみ人しらず。 古今六帖三一九六一 ながれてはいもせの山のなかにおつるよしのの川のよしやよの中	84
一三七	〃	緒絶えの橋		○	○	○		85
一三八	真木柱	石山	○			○	前出。同41	
一三九	〃	井出				○里	拾遺集六九 恵慶。 山吹の花のさかりにゐでにきてこのさとびとになりぬべきかな	86
一四〇	〃	△竹河					前出。同69	
一四一	梅枝	難波の浦		○	○	○	古今集九七三 よみ人しらず。 われを君なにはのうらにありしかばうきめをみつのあまとなりにき	87
一四二	〃	須磨					前出。同23	
一四三～一四五	藤裏葉	河口の関（3例）					古今六帖三一九〇五 かはぐちのせきのあらがきまもれどもいらでわれねぬしのびしのびに	88
一四六	〃	岫田の関				○		89
一四七	〃	住吉の神	○		○		前出。（同30）	

Osaka Shoin Women's University Repository

Osaka Shoin Women's University Repository

付記

1　地名は重複を嫌わず、本文中に見えるものを尽く挙げた。
2　地名の肩に△印を付したものは、作中人物が歌う催馬楽の歌詞中の地名である。
3　証歌は、『源氏物語』の作者と同時代以前または同時代の撰集・家集に見える和歌、又は歌人の詠に限定した。数字は『国歌大観』番号である。
4　証歌は池田亀鑑氏編『源氏物語事典』上巻と、片桐洋一氏監修ひめまつの会編『平安和歌歌枕地名索引』とに拠る。
5　同一の地名・名所名が既に出ている場合は下段の番号から省いた。

（表1）で見る通り、『源氏物語』第一部中に、地名・名所名が使われる回数は実に147回に及ぶ。また、用いられた地名数は82（〔表1〕に見える総数89中から、主題の「大島」と、未解の「夢の渡」と、登場人物が歌う催馬楽の中に出る地名5とを除去した数）を数える。その中、歌学書に歌枕として登載されているものは65例（内、三代集の時代に証歌を求め得ない地名が8例）、歌枕として登載されていないが、三代集の時代の撰集・家集中に見出される和歌、また歌人の詠に証歌を求めることのできる地名が10例ある。歌学書にも見えず、三代集の時代または『源氏物語』と同時代までに詠まれた証歌をも見出せない地名は7例のみである。

右のほかに、『源氏物語』中には、本文中の語としては現れないで、潜在的に存在している地名がある。例えば、

(1)　南の殿にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩はしたなく待ちえたる風のけしきなり。（野分）

(2)　女君、後目に見をこせて「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかに独りごちながめたまふを（澪標）

(3)　「…おのづから、関守強くとも、ものの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひ入りなば、繁くとも障らじかし」と思しよる。（常夏）

(4)　うらなくも思ひけるかな契りしを松より浪は越えじものぞと（明石）

(5)　「…かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思しあはせよ。誓ひしことも」など書きて（明石）

(6)　「棚無し小舟漕ぎかへり、同じ人をや。あなわるや」と言うを（真木柱）

の傍点の部分の引き歌が内蔵している地名の類である。(1)は地の文の例である。傍点部分は、『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず。「宮城野のもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつごと君をこそまて」に拠っている。(2)は独語の例である。

Osaka Shoin Women's University Repository

傍点部分は『新古今集』巻十一恋一、題しらず、伊勢。「み熊野の浦よりをちにこぐ舟のわれをばよそにへだてつるかな」に拠る。(3)は心中思惟の言葉の例である。傍点部分は『重之集』の「筑波山は山しげ山しげけれど思ひいるにはさはらざりけり」に拠る。(4)は和歌の例である。傍点部分は、『古今集巻二十、東歌。「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなん」。『後拾遺集』巻十四恋四、清原元輔。「ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは」に拠る。(5)は消息文の例である。傍点部分は『奥入』所引古歌「忘れじと誓ひしことをあやまたば三笠の山の神もことわれ」に拠る。(6)は会話の詞の例である。傍点部分は『古今集』巻十四恋四、題しらず、読人しらず。「堀江こぐたななしをぶねこぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ」に拠る表現である。それぞれ傍点で示したように地名を内蔵している。

今、このような『源氏物語』に潜在する地名・名所名を第一部の各巻から取り出して、（表1）に倣って歌学書所載の歌枕との関係を見ると次の通りになる。

〔表Ⅱ〕

順位	巻名	引歌（傍点は本文のことば）	地名・名所名	因能	学初	代五	雲八	号番
一	桐壺	古今六帖三三九〇三 いかで猶ありとしらせじたかさごのまつの思はむこともはづかし	高砂の松	○高砂	○			1
二	帚木	新古今九九四　業平。　古今六帖三四一五五 かすがののわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず	春日野	○	○	○	○	2

Osaka Shoin Women's University Repository

三	帚木	新勅撰七三一　よみ人しらず。 あふさかのなをばたのみてこしかどもへだつるせきのつらくもあるかな	逢坂の関	○	○	○	○			
四	空蟬	後撰集七一九　伊尹。 すずかやまいせをのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん	鈴鹿山	○	○	○	○			
五	若紫	古今集七三二　よみ人しらず。 ほりえこぐたななしをぶねこぎかへりおなじ人にや恋ひわたりなむ	堀江	○	○	○	○			
六	〃	後撰集七三二　伊尹。 人しれぬみはいそげども年をへてなどこえがたきあふさかのせき	逢坂の関	○	○	○	○			
七	末摘花	後撰集六八四　土佐。 わが袖は名にたつすゑのまつやまかそらより波のこえぬ日はなし	末の松山		○	○	○			
八	紅葉賀	古今集八九二　よみ人しらず。 おほあらきのもりの下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし	大荒木の森			○	○			
九	〃	源氏釈所引古歌 ひまもなくしげりにけりな大荒木の森こそ夏のかげはしるけれ	〃			○	○			
一〇	〃	催馬楽　呂「石川」 石川の　高麗人に　帯を取られて…縹の帯の　中は絶えたる	石川	○				6	(5)出前	
一一	〃	古今集（元永本）六四九の次　古今六帖（新国）三〇六一　あめのみかど いぬがみのとこのやまなるいさらがはいさとこたへよわがなもらすな	いさら川				○	(50)1表		

Osaka Shoin Women's University Repository

一三	葵	古今集一〇八〇　神遊歌 ささのくまひのくまがはにこまとめてしばしみづかへかげをだにみむ	桧の隈川							7
一三	賢木	後撰集四五八　よみ人しらず。　古今六帖三一七七八 ちはやぶるかみがきやまのさかきばは時雨に色もかはらざりけり	神垣山							8
一四	〃	古今集九四一　よみ人しらず。 よにふればうさこそまされみよしののいはのかけ道ふみならしてむ	み吉野	○	○	○	○		○	9
一五	〃	後撰集一〇九四　素性。 音にきくまつがうらしまけふぞみるうべも心あるあまはすみけり	松が浦島	○	○	○	○		○	(21)1表
一六	須磨	古今集九六二　行平。 わくらばにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ	須磨の浦	○	○	○	○		○	(28)1表
一七	〃	続古今集八七六　行平。 たび人はたもとすずしくなりにけりせきふきこゆるすまのうら風	須磨の関	○	○		○		○	(27)1表
一八	〃	後撰集五六二　よみ人しらず。 すみよしのきしの白波よるよるはあまのよそめにみるぞ悲しき	住吉の岸	○	○		○		○	10
一九	〃	古今集七〇八　よみ人しらず。 すまのあまのしほやくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり	須磨							(23)1表
二〇	明石	恵慶集一三九一六 あさりするよさのあまびとほこるらむうら風ぬるくかすみわたれり	與謝（の海）	○			○		○	11

Osaka Shoin Women's University Repository

二	〃	新古今集一五一三　躬恒。 あはぢにてあはとはるかにみし月の近きこよひはところからかも	淡路								
三	〃	源氏釈　所引古歌 思ふどちいざみにゆかむ玉津しまいり江のそこにしづむ月影	玉津島	○							
三	〃	奥入　所引古歌 わすれじとちかひしことをあやまたば三笠の山のかみもことわれ	三笠の山	○	○	○	○	○			
四	〃	後拾遺集七七〇　元輔 契りきなかたみにそでをしぼりつつ末の松山波こさじとは	末の松山		○			○			
五	澪標	新古今集一〇四八　伊勢。　伊勢集三八〇 みくまののうらよりをちにこぐ舟のわれをばよそにへだてつるかな	み熊野の浦		○	○	○	○	14	(4)出前	
六	〃	後撰集九六一　元良親王。　古今六帖三二八一三　元良親王。 わびぬれば今はたおなじなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ	澪標	○					(37)1表		
七	〃	古今集九一三　よみ人しらず。　古今六帖三二七六三 なにはがた潮みちくらしあま衣たみののしまに鶴なきわたる	難波潟				○		15		
八	〃	古今集　九一三　よみ人しらず。　古今六帖三二七六三 なにはがた潮みちくらしあま衣たみののしまに鶴なきわたる	田蓑の島		○	○	○	○	(38)1表		
九	〃	古今集四〇九　よみ人しらず。　古今六帖三二六七二 ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく船をしぞ思ふ	明石の浦	○	○	○	○	○	(6)1表		
〇	蓬生	古今集九六二　行平。 わくらばにとふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ	須磨の浦		○			○	(28)1表		

Osaka Shoin Women's University Repository

三	〃	古今集九五〇　よみ人しらず。 みよしのの山のあなたにやどもがなよのうきときのかくれ家にせむ	み吉野(の山)							
三	〃	古今集一〇九一　東歌。　古今六帖三四九六 みさぶらひみかさとまをせみやぎのの木の下露は雨にまされり	宮城野	○	○	○	○	○	○	(1)1表
三	〃	古今集九八二　よみ人しらず。 わがいほはみわのやまもと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門	三輪山		○	○	○	○	○	16
西	関屋	古今集一〇九八　東歌。 かひがねをねこし山こしふく風を人にもがもやことつてやらむ	甲斐が嶺	○	○	○	○	○	○	17
三	松風	古今集四〇九　よみ人しらず。 ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく船をしぞおもふ	明石の浦	○	○	○	○	○	○	(6)1表
三	〃	古今集四〇九　よみ人しらず。 ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく船をしぞおもふ	〃	○	○	○	○	○	○	(6)1表
三	〃	古今集九〇九　興風 たれをかもしる人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに	高砂(の松)	○	○	○				(1)出前
三	〃	新古今集一五一三　躬恒。 あはぢにてあはとはるかにみし月の近きこよひはところからかも	淡路							(12)出前
元	朝顔	古今集（清輔本）六四九の次　よみ人しらず。 すまのあまのしほやき衣なれぬればうとくのみこそ見えわたりけれ	須磨							(23)1表
四	〃	新古今集一二一〇　徽子女王。 なれゆくはうきよなればやすまのあまのしほやき衣まどほなるらむ	須磨							(23)1表

Osaka Shoin Women's University Repository

四	〃	拾遺集一三五〇　聖徳太子。 しなてるやかたをかやまにいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし	片岡山									
四一	〃	古今集（元永本）六四九の次　古今六帖（新国）三〇六一　あめのみかど いぬがみのとこのやまなるいさらがはいさとこたへよわがなもらすな	とこの山	○	○	○	○	○	○	○	○	(16)1表
四二	〃	古今集八六七　よみ人しらず。 むらさきの一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る	武蔵野	○	○	○	○	○	○	○	○	(13)1表
四四	少女	古今集九三三　よみ人しらず。 よのなかはなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる。	飛鳥川	○	○	○	○	○	○	○	○	19
四五	〃	拾遺集一二一〇　人麿。　古今六帖三三三九五　人麿。 をとめ子が袖ふるやまのみづがきのひさしきよより思ひそめてき	袖振山			○	○	○	○	○	○	20
四六	〃	拾遺集六六八　人麿。　古今六帖三二七八七 みくまののうらのはまゆふもゝえなす心は思へどただにあはぬかも	み熊野の浦		○	○	○	○	○	○	○	(14)出前
四七	玉鬘	古今集(元永本)六四九の次 古今六帖(新国)三〇六一 あめのみかど いぬがみのとこの山なるいさらかはいさとこたへよわがなもらすな	とこの山	○	○	○	○	○	○	○	○	(16)1表
四八	〃	同　右	いさら川									(50)1表
四九	〃	万葉集一一三〇 ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじしかのすめ神	志珂（の島）	○							○	21
五〇	〃	古今集一〇〇九　よみ人しらず。 はつせがはふるかはのべに二本ある杉年をへて又もあひみん二本ある杉	初瀬川	○	○	○	○	○	○	○	○	(67)1表

Osaka Shoin Women's University Repository

五一	玉鬘	古今六帖三二四三〇 いのりつつ頼みぞわたるはつせがはうれしきせにも流れあふやと	初瀬川	○	○	○	○	○	○	(67)1表
五二	初音	古今集一〇八六　黒主 近江のやかがみのやまをたてたればかねてぞ見ゆる君がちとせは	鏡の山	○	○	○	○	○	○	22
五三	胡蝶	古今集八六七　よみ人知らず むらさきのひともとゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞみる	武蔵野	○	○	○	○	○	○	(13)1表
五四	〃	後撰集八一〇　伊勢。古今六帖三三一七六　伊勢。 わがやどとたのむよしのに君し入らばおなじかざしをさしこそはせめ	吉野							23
五五	常夏	新古今集一〇一三　重之。 つくばやまは山しげ山しげけれど思ひいるにはさはらざりけり	筑波山		○	○	○	○	○	24
五六	野分	古今集六九四　よみ人しらず。 みやぎののもとあらのこはぎつゆをおもみ風をまつごと君をこそまて	宮城野	○	○	○	○	○	○	(1)1表
五七	行幸	新古今集九九四　業平。　古今六帖三四一五五　業平。 かすがののわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず	春日野	○	○	○	○	○	○	(2)出前
五八	藤袴	後撰集一一七八　よみ人しらず。 武蔵野は袖ひつばかりわけしかどわか紫はたづねわびにき	武蔵野	○	○	○	○	○	○	(13)1表
五九	〃	古今六帖三四三五三 しらねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ	〃	○	○	○	○	○	○	(13)1表
六〇	〃	後撰集九六一一　元良親王。　拾遺集七六六　元良親王。 わびぬれば今はた同じなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ	澪標	○						(37)1表

Osaka Shoin Women's University Repository

六一	真木柱	古今集七〇八　よみ人しらず。 須磨のあまの塩やくけぶり風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり 古今集七三二　よみ人しらず。 ほりえこぐ棚なし小船こぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ	須磨		
六三	〃		堀江	○	(36) 1表
				○	(23) 1表
				○	
				○	

附記、「新国」は『新編国歌大観』の略称。〔表1〕及び〔表Ⅱ〕中に既出の地名は下欄の番号から省いた。

『源氏物語』第一部の、本文中に、引歌に含まれて潜在する地名・名所名の登場回数は62回、地名・名所名の実数は39（この中から表1に既出のものを除くと24）が認められる。この24例を分類すると

a　歌学書に登載されているもの……21例

b　歌学書に登載されていないが、三代集時代に証歌を求め得るもの……3例

c　aの中、三代集の時代に証歌を求め得ないもの……0（注2）

d　歌学書に記載なく、三代集の時代に証歌をも求め得ないもの……0

となる。これを先に〔表Ⅰ〕で見たところに加えると、次の通りになる。

〔表Ⅲ〕

地名・名所名	登場回数	実数	a	b	c	d
顕在するもの	147	82	65	10	8	7
潜在するもの	62	24	21	3	0	0
計	209	106	86	13	8	7

Osaka Shoin Women's University Repository

〔表Ⅲ〕により、『源氏物語』の第一部に出る土地・名所は、總数106例中91例（a－c＋b）までが、三代集の時代から『源氏物語』の時代までの和歌を背景に持つ、歌枕であることがわかる。その時代に証歌を求め得ない土地・名所は總数106例中の15例（c＋d）。約一・四割に過ぎない。この15例の土地・名所が、『源氏物語』第一部で果している役割を次に見よう。

まず、c群の8例を登場順に並べると、㈠金の岬、㈡松浦、㈢椿市、㈣山吹の崎、㈤常陸の浦、㈥駿河の海、㈦緒絶の橋、㈧岫田の関となる。㈠・㈡・㈢は玉鬘の巻に出る。㈠は幼い玉鬘を伴った小弐の一行が、筑紫の本土に入った最初の通過地点、㈡は小弐の死後、乳母一家が玉鬘を護って住んでいた肥前の地。両者とも『万葉集』によって都人にも馴染の地名を、作者が選んだものと考えられる。㈢は、玉鬘の開運を祈るために乳母一家が供をして初瀬寺に詣る途中のこの地で一行は、主君の死後遺された姫君を久しく捜し求めていた、夕顔の侍女、今は紫の上に仕える女房右近と邂逅する。ここは初瀬に参詣する人が必ず泊る土地で、観音の利生によって玉鬘と右近が出合うのに、これ以上恰好の地点はない。此処もまた、『万葉集』(二九五一・三一〇一)に歌われている名所である。㈣以下はすべて作中人物の詠む和歌の中に使われて、修辞を扶ける働きをしている。㈣は胡蝶の巻で、六条院の春の御殿に招かれた秋好む中宮の女房が、池の汀の山吹を、近江の名所に見立てて嘆賞する和歌に用いられている。㈤・㈥は、常夏の巻に見える。内大臣家に迎え取られた落胤の近江の君が、異母姉の女御に贈った和歌に詠みこんだ三ケ国の名所の中の二つである。㈦は玉鬘を実の姉と知らずに恋文を贈った柏木が、事実を知った後、彼女に詠みかけた歌の中で「ふみまどひ」を言い起すために使った、陸奥の名所。藤袴の巻に見える。㈧は藤裏葉の巻に出る。夕霧が、雲井雁に答えた和歌の中で、彼女との結婚を阻んだ内大臣を、伊勢の国の関に擬えた言葉である。c群に属する地名・名所名は、外ならぬ『源氏物語』の作者自身の手で、証歌の裏づけを持つ三代集の時代の歌枕と何ら変りなく駆使されていることが、以上に見たところによって明かである。

これに反して、d群の地名・名所名は非歌枕として、極めて散文的に使われている。dに属する7例を、登場順に挙げると、㈠大江殿、㈡松浦の宮の前の渚、㈢川尻、㈣韓泊、㈤八幡の宮、㈥清水の御寺、㈦観世音寺となる。㈠は、須磨の巻で、源氏が須磨の謫居に赴く途中に立寄る難波の旧蹟である。池田亀鑑氏編『源氏物語事典』上巻に、歴史の湮滅した名所であろうと説いているのに従って、「名所」と解して別扱いとする。㈡以下は全部玉鬘の巻に出る。㈡は、「松浦の浦」というべきところを、技法上からわざとこの言葉に言い換えたと解して、筆者の私見で一項を設けた。肥後の豪族、太夫の監の強引な求婚から逃れさせるために、玉鬘を護って乳母とその子女の一行が船出をする場面に使われている海岸である。「松浦の浦」が『万葉集』巻五、八五六に「松浦がた」が同八六八に見えるが、

Osaka Shoin Women's University Repository

『源氏』の作者は、余計な情緒が付纏うのを避けるために、歌枕的な、連想を持込む恐れのある用語を嫌ったのだと考えられる。この言葉に言い換える手段によって、船上の人の視点から、漕ぎ離れ行く浦の美景を、端的に印象深く描写したのであろう。㈢・㈣は海路をとって帰京する一行の通過地点である。㈢は摂津の淀川の支流神崎川の河口。京へはここから江口を経て淀川を遡る。瀬戸内海航路の起点である。㈣は播磨の国府の外港、川尻まで海路三日の地点である。作者は肥前の松浦から播磨の響の灘に至るまでの、全航程の約九割を占める通過地点の港名を悉く省く手法によって、監の追跡を恐れる一行の必死の逃走を描き、航路の終点㈢が近いことを暗示する船唄によって、一行の脱走が遂に成功したことを、的確に表現した。㈢・㈣の地名は通過地として用いられただけでない。物語のスリリングな展開に大きな役割を果したのであった。㈤は帰京した玉鬘が神助を願って参詣する男山八幡宮。「石清水」と同義語であるが、歌語的な美的な「石清水」よりも、即物的な呼称である。㈥は㈦の俗称。㈦は太宰府の近くにある名刹で、菅公の詩(注3)によって高名な名所であるが、物語の中ではそれとは全く無関係に、玉鬘の下仕えの女房が田舎者ぶりを発揮する言葉の中で使われている。以上に見てきたところによって、非歌枕的土地・名所は至極僅少で、しかもそれ自体が他と取替えの利かない絶対的地点に存在し、他面、情緒的雰囲気を拒否する直截的性格を持つものであることが、明かになった。

一方、筆者が主題とする「大島」は、これらの地名・名所名とは異なり、冒頭に掲げた本文中で夢幻的憧憬と望郷の思念に作中人物を誘いこむ役割を果している。この、地名の担う役割の相違は重要なポイントである。この事実に、上に見てきた、『源氏物語』第一部の地名についての考察から得た知識を加えて考えると、「大島」が歌枕である可能性は否み難いと思われる。

Osaka Shoin Women's University Repository

二　作中人物の旅行中の和歌と地名

『源氏物語』第一部に出る作中人物の、地方への旅と旅行中の和歌とを取出すと次の通りである。

〔表Ⅳ〕

番号	巻名	人物名	往・還	出発地点	目的地	本文中に出る通過地	和歌
1	賢木	六条御息所と斎宮	往	京、大極殿	伊勢斎宮	逢坂の関	御息所、源氏に返歌をとどける
2	須磨	源氏	往	京、二条院	須磨謫居	難波大江殿跡・海上	源氏独詠二首
3	須磨	宰相中将	往	京	源氏の謫居		
4	須磨	宰相中将	還	須磨	京		
5	明石	源氏	往	須磨	明石入道の邸		
6	明石	源氏	還	明石	京、二条院	難波	
7	澪標	明石姫の乳母	往	京	明石入道邸	津の国	
8	澪標	源氏の使臣	往・還	京	明石入道邸		
9	澪標	六条御息所と斎宮	還	伊勢斎宮	京、六条邸		
10	澪標	源氏	往	京、二条院	住吉社		惟光と源氏唱和
11	澪標	明石の君	往	明石の浦	住吉社	難波	
12	澪標	源氏	還	住吉社	京、二条院	難波・堀江・田蓑の島	源氏と明石の君贈答・源氏独詠
13	澪標	明石の君	還	住吉社	明石、入道邸		
14	蓬生	大弐の妻・侍従	往	京	太宰府		
15	蓬生	大弐の妻・侍従	還	太宰府	京		

Osaka Shoin Women's University Repository

16	関屋	空蟬	還	常陸国府	京	逢坂の関	空蟬独詠
17	関屋	源氏	往	京	石山	逢坂の関	
18	関屋	源氏	還	石山	京		源氏空蟬に贈歌
19	松風	明石の君・母尼君	往	明石の浦	大井の里		船中、母娘唱和
20	玉鬘	玉鬘・小弐とその家族	往	京	太宰府	大島・鐘の御崎	船中、小弐の娘姉妹唱和
21	玉鬘	玉鬘・豊後介・乳母ら	還	肥前松浦	京	松浦の浜・響の灘・韓泊・川尻	船中、兵部と玉鬘唱和 船中、乳母独詠

〔表Ⅳ〕の和歌欄に記載された和歌を次に挙げる。（数字は、〔表Ⅳ〕の番号欄の数字。○印は歌枕を示す。）

1　○鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ　（六条御息所）

2－a　唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家ゐをやせむ　（源氏）

2－b　ふるさとを峰の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲ゐか　（源氏）

10－a　すみよしのまつこそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば　（惟光）

10－b　あらかりし浪のまよひにすみよしの神をばかけてわすれやはする　（源氏）

12－a　みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな　（源氏）

12－b　数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ　（明石の君）

12－c　露けさのむかしに似たる旅ごろも田蓑の島の名にはかくれず　（源氏）

16　行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ　（空蟬）

18　わくらばに行きあふみちをたのみしもなほかひなしやしほならぬ海　（源氏）

19－a　かの岸に心よりにしあま舟のそむきし方にこぎかへる

Osaka Shoin Women's University Repository

かな　（明石の尼）

19－b　いくかへりゆきかふ秋をすぐしつつうき木にのりてわれかへるらん　（明石の君）

20－a
20－b　〜（主題「大島」に関連するので暫くおく。）

21－a　浮島をこぎはなれても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな　（兵部）

21－b　行くさきも見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそ浮きたれ　（玉鬘）

21－c　うきことに胸のみ騒ぐひびきにはひびきの灘もさはらざりけり　（乳母）

以上に見た作中人物の旅先での詠歌15首のうちに

A　歌枕を詠みこんだ和歌……9首

B　歌枕を詠みこまない和歌……6首

がある。

2－aには「大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。」（須磨）という前文がある。「大江」は難波の入江。『紫明抄』[注4]に「わたのへやおほえのきしにやどりしてくもゐに見ゆるいこま山かな　後拾遺良暹　渡辺橋東岸、今謂楼岸、昔此所立駅楼歟」、『河海抄』[注4]に「後拾遺良暹法師哥に　わたのへやおほえのきしにやとりして雲ゐにみゆるいこま山かな　とありぞしるしなる。」（須磨）という前文がある。「大江」は難波の入江。『紫明抄』[注4]に「わたのへやおほえのきしにやどりしてくもゐに見ゆるいこま山かな　後拾遺良暹　渡辺橋東岸、今謂楼岸、昔此所立駅楼歟」、『河海抄』[注4]に「後拾遺良暹法師哥に　わたのへやおほえのきしにやとりして雲ゐにみゆるいこま山かな　とあり（若）此所歟　但松はかりそしるしなりけるといへり定有古哥歟可勘（後略）」と注している。良暹は、『後拾遺集』初出、長暦・永承の頃活躍した歌人であるので、右記の和歌はこの際の証歌とはし難い。よって、『河海抄』の示唆に従って、「大江殿」は、今は「歴史の湮滅した名所」[注5]と考えるのが、適切であろう。この様に、前文が旧い名所を潜在させているので、(2)－aの源氏の旅中の和歌は、あらためて歌枕を詠みこむには及ばなかったのである。(2)－bは、aとその前後の文とが描く絵巻風の光景を継承して海上舟行の場面を構成したので、一続きの雰囲気を乱したりイメージを壊したりしたくないので、わざと歌枕を持ち込まなかったものと想像される。19－a・19－bの唱和の場合も、前文に「昔の人もあはれと言ひける浦の朝霧、隔たりゆくままにいとものの悲しくて、入道は、心澄みはつまじくあくがれゐたり。（略）尼君は泣きたまふ。」（松風）とあって、歌枕「（明石の）浦」と名物「朝霧」を背景に、　有名な「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」（『古今集』巻九羈旅　よみ人しらず）をまる取りした文章で、絵画的に別れの舟出の光景を描いたので、19－aの方は「明石の浦」というところを「かの岸」と言換えて表現したのである。くどくなって情趣が破壊されるのを嫌ったのであろう。同じ理由のもとに19－bも「いくかへり行きかふ秋」に明石の浦の秋の意を込めて、歌枕を詠みこむことをわざと控えたのであろうと思われる。しかし、21－a・21－bの場合はこれらとは異る。19－aは

Osaka Shoin Women's University Repository

「いづく泊と知らず」、19－bは「風にまかする身」が発想の核心である。歌枕が入ると雰囲気がこわれる。ここには歌枕が入り込む余地はない。21－aの「うき島」は、船中から顧る肥前の本土――肥後の監の姫君に対する無体な求婚をはじめ、それまでの十数年に亘る流離の憂き日日を過した土地を、都人の視点から顧る言葉であって、固有名詞ではない。前文の「年経つる古里とて、ことに見棄てがたきこともなし、ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむかへりみせられて悲しかりける。」の「松浦の宮の前の渚」が歌枕として使われたものではないのは既に見たところである。監の恐怖からの脱出は、一行にとって更に新たな流浪への舟出を意味する。その上、寸秒を争う出港である。歌枕といった情趣的修辞を受付ける場合ではない。

以上に見て来たところでは、『源氏物語』第一部に出る、作中人物――多くの場合主人公である――が、旅先で詠む和歌は、贈答・唱和・独詠のどの場合でも、その通過地の歌枕を詠み込むのが原則的のようである。歌枕を詠みこんでいない和歌が見出されるのは、修辞上の配慮とか、詠み手の置かれている切迫した環境とか、その歌に歌枕が入ることを拒否する特別の事由が存在する場合に限ることがわかった。この事実を根拠に、われわれは、「大島」が歌枕だと主張し得るであろう。

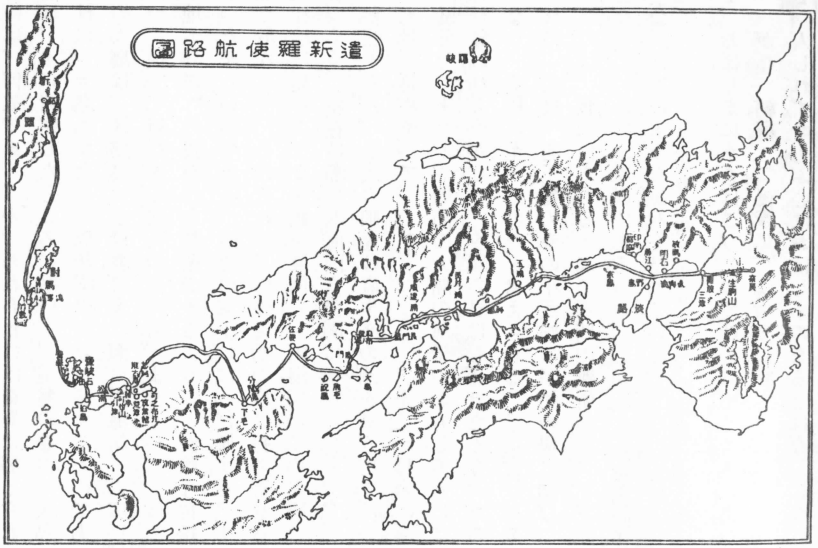
三　瀬戸内海の航路

小弐一行が玉鬘を伴って、筑紫に向った際にとったと思われる交通路について考えてみようと思う。

『延喜式』民部下に「凡山陽。南海。西海道等府国。新任官人赴レ任者。皆取二海路一。（中略）其大弐已上乃取二陸路一。」とある。玉鬘の乳母の夫は小弐に任ぜられて太宰府に赴くのであるから、一行は、京から攝津の国の川尻まで川下りをして、川尻から瀬戸内海を西下したのである。藤岡謙二郎氏編『古代日本の交通路Ⅳ』第九章「水運と港津」に拠ると、古代の瀬戸内海航路は二つあった。一つは『万葉集』の遣新羅使の航路から辿られる、大伴の三津（難波三津）→武庫浦→明石浦→備後の長井浦→安芸の風速浦→周防の麻里布浦→周防の熊毛浦→佐波津→筑紫館であり、他の一つは伊予沿岸に沿うものであった。一行の道は前者であるが、延暦四年以後は淀川と神崎川が通じ、神崎川河口に設けられた川尻の港が、京への、具体的には淀への仲継点となったので、一行は川尻から上記の内海航路に就いたのであった。左に佐々木信綱博士著『萬葉辞典』巻末に附載されている「遣新羅使航路図」を転載する。二重破線が航路である。

『五代集歌枕』と『八雲御抄』が「大島」を備前と記しているが、岡山県の大島郷は淺口郡（備中）にあり、しかも「此郷島を以て名つけらると雖、島にあらず、一陸角のみ」と吉田東

Osaka Shoin Women's University Repository



伍博士著『大日本地名辞書』にある。同書の周防大島郡の条には「大島郡　玖珂の東南、熊毛の東なる海島にして、面積方七里、其形状西部に方二里半余の島山をなし、（高峰加納山七百米突）東方に狭長なる尾を延く長五里、横幅四十町より八町に至る。其四傍に属島二十許、面積合計二方里、（中略）吉備の兒島小豆島などと共に往昔より著れ、殊に国造本紀に『大島国造、志賀高穴朝、兄邪志国造同祖、兄多毛比命兒、穴倭古命定賜』とありて、特立の一島也、又萬葉に大島の鳴門とあるは、今の大畠の瀬戸を云ふ（下略）」と記している。佐々木信綱博士著『萬葉辞典』にも「おほしま　大島（地名）　周防国大島。一名屋代島。本島と本土との間に鳴潮を生ずる。大島の鳴門を過ぎて（十五の三六三八の右）」とある。片桐洋一氏著『歌枕歌ことば辞典』には「おほしま（大島）「大島の鳴門」「大島の鳴門の浦」という形でもよまれた周防の国の歌枕。今の山口県大島郡。同玖珂郡大畠村との海峡を大島の鳴門という。「都にと急ぐかひなく大島の瀬のかけぢは潮満ちにけり」（恵慶集）とうたわれたように、干満潮時には潮流が激しく、航行が困難となる難所であった。（後略）」と見える。歌枕の「大島」は以上に見る通り周防の国の大島を指すものである。

『河海抄』に「ふな人もたれをこふとかおほしまのうらかなしげにこゑのきこゆる　大嶋　筑前国也　鐘御崎近辺也」と注記されて以来、玉鬘の巻の大島に関しては、現在に至るまでの諸注釈書・事典・辞典が悉く右の『河海抄』の説を踏襲して来

Osaka Shoin Women's University Repository

たのは、何故であろうか。われわれには奇異に感じられる。筆者は、上に考察したところに基いて、玉鬘の巻の「大島」を、歌枕の「大島」、すなわち周防国の大島と解するものである。周防の大島は、淡路島・小豆島に次ぐ瀬戸内海第三の広い地積を持つ。従って航行する何人の目にもとまり易い。しかも、『大日本地名辞書』の説明から想像できるように、優雅な稜線を長く延いた美しい島である。四辺の海上には、付属する二十余の小島が散在して、それぞれに、白砂青松の岸に打ち寄せる白波が大和絵に見るような景観を展開し、内海切っての名勝の海域を形づくる。(現在は瀬戸内海国立公園に指定されている。)航路図を参照すると、小弐の娘達は麻里布の浦を漕ぎ出て沖合からこの光景を眺めやって、「おもしろき所々」を二十日余の海路の旅で随分見て来たが、周防の大島の風景のおもしろさには、眼も心も奪われる思がして、夕顔の君にも見せたくなったのが誘因となり、唱和に至ったのだと考えられる。[注6]『河海抄』以来諸書が、歌枕の「大島」を玉鬘の巻の小弐娘の唱和の場に結びつけなかったのは、航路にあたる大島の鳴門の難所のイメージが先入主となっていたのが原因であろうか。しかし、三代集の時代には、「大島」は次のような証歌を持っている。

1　おほしまに水をはこびしはや船のはやくも人にあひみてしがな　朝綱　(『後撰集』・『古今六帖』)

2　人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな　よみびとしらず　(『後撰集』)

3　さながらもつらき心はおほしまのなるとをたてしほどのわびしさ　(『一条摂政集』)

また『源氏物語』と同時代の歌人の詠には

4　おほしまやとわたる船のかぢまくらおつるしづくにぬれつつぞゆく　(『大弐高遠集』)

5　こよだにもかよはんことはおほしまやいかになるとの浦とかは見し　(『和泉式部集』)

1～5すべて恋の歌である。主眼は難所のイメージを詠んだものではない。恋をまだ知らぬ十歳前後の小弐娘達が、幻影に描いて涙し憧れる対象は、優しい女君と都であった。二人の唱和の場として「歌枕の大島」の美しい海景とそののどやかな雰囲気は、不似合ではなさそうに思われる。

『河海抄』の示す筑前国の大島も航路にあたる。これは外洋である。瀬戸内の多島海々域の眺望は、平安時代の京育ちの少女たちの感覚には、異境として映ったであろうが、優雅で馴染み易いものであった。玄海は彼女らにとって正しく「人の国」である。内海で見馴れていた色とは異る海の青、白波の波長の長いうねりは、いかに好天を選んだとしても、「二人さし向ひて」和歌を唱和する心の余裕を与えてくれまい。一行の大人たちもいよいよ西海道に入ったという実感を味ったに違いない。対岸は鐘の御崎、筑紫の本土である。上陸地点博多津が間近に迫る

Osaka Shoin Women's University Repository

心慌しさと船の横揺れとの交錯した、現実的な緊迫感は、冒頭に掲げた原文から感じるのどやかな時・空や浪漫的な雰囲気とは、どう見ても不一致である。『源氏物語』の作者は、実際に筑前に行ったことはないが、家集に親しい友が筑紫に下ったことを記している。玄海灘の鮮烈なイメージは体験しなくても、外洋の感じのおおよそは察知していたことと思われる。絵巻物の一場面のような、娘たちの海上唱和の舞台として、作者が玄海灘の「大島」よりも、優雅な内海の「大島」を選定したと考える方が自然ではなかろうか。

四　玉鬘の巻の「大島」と歌枕

かく言ったからとて、結論を出すに当って筆者は地理的事実を最優先に尊重しようと思うものではない。玉鬘の巻の「大島」にあっては、最も重要な問題は、それが歌枕だという点にあると筆者は考える。以下にそのことを述べたい。

「歌枕の大島」の持っている因子を数えると次のようになるであろう。

1　山陽道の西端に近い、京から遠く隔った辺鄙に位置する。
2　目的地である西海道（九州）に踏み入れる前の、境界に位置している。
3　絵画的なのどかな景勝の地である。
4　恋歌に詠まれていて、知名である。
5　行く手に航行の難所として古くから和歌に詠まれてきた、「大島の鳴門」を抱えている。

篠原昭二氏は「特定の土地が物語の舞台として求められる理由は何かという問題は、具体的には、それらが物語においていかなる役割を果しているかという問題に置き換えてよいだろう。」[注7]と云われる。冒頭に引いた、小式の娘達の船中唱和の場面に、ここに掲げた「大島」の持っている諸因子が果している役割を見ると、

(1)　安藝以西は、『延喜式』[注8]に遠国とされている。太宰府に赴く航路では、周防は本土の最果てである。在京の時分には知らなかった海、その浪枕の生活が久しく続いている。親たちには、半面では心の彈む昇任の旅であるが、娘たちの繊細な神経は流離の感傷に堪えられなくなる。大島はそういう地点にある。

(2)　見知らぬ辺土筑紫に入る前の、境界の地点で、娘たちは、京に居る（と彼女らは信じていたい）恋しい女主人にも都にも、いよいよ手が届かなくなる世界に入るのだと思うと、自分は都人だと一層痛切に思い知る。丁度その時、舟子達の唄が聞えてくる、望郷の唄だ。という仕組である。都人に特殊な心象をもたらす「境界」が、適切に利いている。

(3)　前文に「おもしろき所どころを見つつ」とある。京の人の知らない島々や半島の美景が、異郷の長閑な時・空と、

Osaka Shoin Women's University Repository

流離の人の切迫した感情とを美的に統一して、絵画的な場面を構成する。

(4) 恋歌のイメージを背景に持つことにより、娘達の都恋しさ女君恋しさの思いが、限りなく切実に感じられる。

(5) 娘たちは、行く手に「鳴門」の難所が待つことを聞かされていないのかも知れない。未知の危険が潜んでいることが、この唱和の場面の浪漫的な味わいを一層深くする。

われわれは更に、この(1)～(5)が玉鬘物語の全体に加えている意味を見落してはならないであろう。この個所は、これまで噂にだけ上っていた夕顔の女兒が、はじめて物語の表面に登場する場面である。玉鬘物語の筋の上から見ると、乳母子姉妹が、幼い姫の代弁者として、夕顔を慕い都を恋い、流離の旅を歎く衷情を訴えているのだと考えることも可能であろう。母の死を知らない玉鬘が、物心のつかない今の時点で、半生の漂泊の運命に足を踏み入れた形で、海上の旅に出るこの場面は、後に、彼女が右大将の正室として、養父源氏の四十の賀に先頭を切って若菜を献じ（若菜上）、華麗な幸福な結末を見せる大団円と呼応する、玉鬘物語の発端である。聰く美しく幼い姫の、数奇な人生への出発として、上掲の本文を読むと、

(1) 夕顔の巻との連繋。

(2) 継子姫の流浪の話型[注10]。

(3) 運命的な漂泊が続きそうな不安感。

玉鬘物語を構成する主要な因子が、出揃っているのを読み取ることができる。しかも、そこには「歌枕大島」の持つ(1)～(5)の因子が、実に効果的に作用しているのに気がつく。(1)～(5)はすでに見たところであるが、蛇足を加えると

おほしまに水をはこびしはや船のはやくも人にあひみてしがな

大島やとわたる船のかぢまくらおつるしづくにぬれつつぞゆく

これらの和歌を思い浮べつつ小弐の娘の唱和の場面を読む時、われわれは心の核心に、異郷に流浪する幼い人たちの、夕顔の君恋し、京恋しの思念が、直接に伝わってくるのをおぼえる。日常言語では表せない、散文では描き出せない登場人場の感情が、和歌だからこそ、またその場所が歌枕だからこそ伝達できるのである。篠原昭二氏は「場の持つ景気が物語にとって小道具的な彩にとどまるのでなく、人間が場と深く相関することでそこに固有の姿を現出するという認識は源氏物語が切り開いた思想であると言ってもよい。」[注11]と云われる。土地の持つ固有のイメージに表現を受け持たせる和歌の技法＝「歌枕」を使って、旅する人物の心象を形成し、またこれを表現する手法ーこれは『源氏物語』が開発した表現技術だと云ってもよいであろう。われわれが、冒頭の本文中に見出したものは、実に、この方法である。これによっても「大島」は「歌枕の大島」をおいて他にないことを、作者自身が鮮やかに立証しているのを、われわれは目にすることができる。

Osaka Shoin Women's University Repository

以上に見てきたところによって、筆者は玉鬘の巻の「大島」を、歌枕の「大島」、すなわち、周防国大島郡（現在は山口県大島郡）であると判断するものである。

（注）

1 引用本文は『日本古典文学全集』本に拠る。

2 「玉津島」(13)は『古今集』九一二、読人しらず。に、「志珂」(21)は『重之集』五に証歌を持つ。

3 「都府楼纔看瓦色　観音寺只聴鐘声」（『菅家後草』不出門）。

4 玉上琢彌編 山本利達 石田穣二 校訂『紫明抄・河海抄』に拠る。

5 池田亀鑑編『源氏物語事典』上巻「大江殿」の項

6 『延喜式』主計上に「安藝 行程上十四日下七日 海路十八日　周防 行程上十九日下十日 長門 行程上廿一日下十一日 海路廿三日」とある。

7 「洛外の風土にも物語の舞台を求めたのはなぜか」（「国文学」昭55・5）

8 『延喜式』民部上に「山陽道（略）安藝国　周防国　長門国右為遠国」と見える。

9 帚木・夕顔両巻。前者では頭中将の話、後者では右近の話に出る。

10 三谷邦明「玉鬘十帖の方法―玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造」（『論集中古文学』一）

11 7に同じ。